

国
語
B

(90分)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、表記の一部を改めた)。(60点)

「雪のいと高う降りたるを、例ならず」の章段は、枕草子の中でも清少納言の才気を最大限に効果的に示したエピソードとして、もつとも著名な章段の一つとして、「春は曙」の章段とともに常に教科書に取り上げられて来た。教科書における「枕草子」を代表するものと言ってよいだろう。では、なぜこの章段がそれほど繰り返し、取り上げられたのかを、考察してみよう。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃すすびに火おこして、物語などしてあつまりさぶら

ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの

宮の人にはさべきなめり」と言ふ。(280段—段数及び本文は小学館新古典全集本による)

これがすべての①わずか四行の短章段であること。②その短い中に、白楽天の詩を踏まえたやり取りが含まれ、漢詩文の教養を踏まえ、さらにこれを日常生活の中で、消化しているさまが見える章段であること。③中宮定子によって発せられた問いに、清少納言が答えようとした、典型的な問／答章段であること。④これが「この宮の人にはさべきなめり」と、評されたように、定子サロンの文化を代表するやり取りであると捉えられたためであること。そして、⑤この場面が江戸時代以来、しばしば絵画化されて、清少納言像を代表するものとなっていたこと、などの理由がこの段を著名なものにしたと考えられる。

(中略)

それにしても清少納言だけが名指しで、「香炉峰の雪」の謎を解明する役割を投げかけられて、満座の注目を浴びながら、その問いが意味するものを、答えることを求められているのは、なぜだろうか。選ばれた者として、それにふさわしい答えを出しなければならぬ清少納言の緊張の一瞬——何がここで問題なのかを必死で考える鼓動の高まり——がここには凝縮された表現の中に、感じ取られる。

「香炉峰の雪は」と問われて、「簾すだれを掲げて見る」と応えるのは、「さる事は知り、歌などにさへ歌ふを」と人々が反応したとあ

るように、当時の一般常識だったから、その予想された答えを返してみても、何の面白味もなく、そこその評価しか得られなかっただろう。誰でもが知っている名句を清少納言だけに発問したのは、一を聞いて十を知る応用力において、定子サロンにあつて、清少納言の右に出る者がいなかったせいには違いない。

A 知識の上を定子が求めていることを、瞬時に掴み取って、行動に移した清少納言の振舞いに、定子は「笑はせたまふ」という反応で応えている。期待に込めてもらった満足の笑みであると同時に、そんな些細なことにまで、クイズ風のやり取りを織り込み、漢詩文の雰囲気を求める風狂ぶりに、みずから苦笑するかのような照れもここには窺える。枕草子の中には、定子出題、清少納言応答、定子の笑いで締めくくられる話が多いが、賞賛というよりも、苦笑であるところに、二人の突出した共振関係がよく現れている。

そのような呼応関係こそ、この後宮では理想とされたものであることを、人々の発言は裏付ける。その場にいた人々は、このやり取りの緊迫の証人として、清少納言の行動を称えるだけでなく、そのような「振舞い」が、まさに中宮定子のサロンに要求されていたことを証言する。

人々も「さる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ奇らざりつれ。なほ、この宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

C とうい発言は、筆者清少納言のいいたいことを代弁して語ってくれているという意味で、筆者の身分的な発言となっている。いわゆる「われぼめ譚」と呼ばれる清少納言の自慢話では、常にこのような、賞賛の言葉を聞かせる存在、清少納言の振舞いを語り聞かせてくれるような第三者が登場することが指摘されている。この場面の発言も、まったくのでっち上げであるとは思われないが、筆者によって都合のよい発言に加工されていると考えておいた方がよいだろう。

ここで筆者が訴えようとしているのは、このようなやり取りが決して筆者個人の手柄話ではなく、定子後宮の雰囲気伝える逸話であるという位置づけである。「清涼殿の丑寅の隅の」の章段にもみられるように、中宮定子は常に女房教育に意欲的であり、あらゆる機会を捉えて、宮廷文化創出の努力を欠かさず、趣向を提示し、ふさわしい答えを要求し続け、叱咤激励に余念がなかった。

それは、定子自身、宮廷女房の娘であったことと深く関わっているに違いない。定子の父関白道隆は、摂関家の嫡流として、恵まれたコースをたどったが、母高階貴子は円融天皇時代の内侍として著名ながら、受領階級の出身であり、また業平(注1)以来のスキヤンダルを背負った高階家の出でもあって、当時の常識からすれば、身分不相応な玉の輿婚であった。当時摂関家の息子たちは、家格を上げるべく、皇族出身の北の方を迎えることが多かったのである。宮仕えに出た女性を軽薄な存在として非難し、深窓に養われた娘を北の方としてふさわしい存在としたこの時代に、母に多くの人々に顔を曝す女房づとめの経験があることが、定子の傷のように言いなされたことも想像に難くない。

その欠点を逆手にとつて、定子とその母は、もと宮廷女房でなければなしえない見事な世論操作の名手として、カンゼンと世論に立ち向かい、見事にこれを籠絡し、味方につけることに成功しているのである。この時代最高の学才の持ち主として敬意を集めた高階成忠の娘であり、女ながら、漢詩文の才を認められて、円融朝の花であった貴子は、その男まさりの学才で活躍の場を広げていたが、道隆との間にできた子女に漢詩文の才能を叩き込み、これを、宮廷世界のなかで、見事に演出することで、競合する家に差を付けていた。

貴子の生んだ長男伊周は、優れた漢詩文作者として著名であったし、奇行で有名な定子の妹三女(敦道親王妃)も漢詩文にゾウケイが深かったことが伝えられている(大鏡)。やはり少女時代から、男性なみに漢詩文を仕込まれたらしい定子は、その漢詩文の才能を特化させた、個性的なサロンを作り上げていた。

清少納言と並び称された才女宰相君は、(注2) 齊信の、新樂府引用に対して、「瓦に松はありつや」と原詩を和文化して答え、清少納言もまた齊信とのやりとりの中で、「蘆山ノ雨ノ夜草庵ノ中」を、「草の庵を誰か尋ねむ」と、歌の下の句の形で引用し、さらなる発問につなげている。いふなれば、このような、漢詩文の教養を基盤に、自在に加工し、和文化し、日常の端々に使いくこなすことこそ、定子後宮において志向されていた姿勢だったのであり、定子後宮の文化であることが、ここで言挙げされているのである。

枕草子の中でも、「花の木ならぬは」「木の花は」「鳥は」「草の花は」などの章段で明らかに「唐」伝来の木・草・鳥・虫に興味を

寄せているところが見られるのも、このような漢詩文優位の定子サロンの記録としての使命感によるところが大きいと考えられる。

定子後宮の話題づくりは、こうした漢詩文引用を含めたものに偏向しており、そのことは同時に、枕草子がめざしている読者が女性たちだけでなく、男性もふくめた者たちであることを物語っている。漢詩文をあやつることが男性官人たちの必須の教養であったこの時代にあつて、枕草子は、女性ながら、男性たちよりも、はるかに自然に、何気なく漢詩文を取り込んでみせることで、^D男性官人たちの頑かたくな学びと模倣を挑発し、相対化する。そのような挑戦の気配に満ちた演技・演出がここでは展開されていたのであり、それは清少納言の個人プレーというよりも、定子によって企画され、清少納言をヒロインに、その場にいた女房たちによって、⁵喧伝けんでんされることになる、定子後宮上げての、教養披露場面だったのである。

(中略)

この稿のはじめに、この章段が江戸時代・近代に再三絵画化され、清少納言図の基本となったことを指摘しておいた。源氏物語などと違って、枕草子は絵画化されることがなく、鎌倉時代末期に制作された枕草子絵巻を例外として、江戸時代の版本のなかにも挿絵を伴ったものはなかった。ところが、18世紀後半から、清少納言が簾を掲げて雪を見る姿(注4)とさきつわきが土佐光起の有名な清少納言図をはじめとして、大量に反復して絵画化されるようになった。

このような江戸時代の清少納言像を比較・検討した中島和歌子は、座つて簾を巻き上げる清少納言から、立つて派手に簾を上げる立像の清少納言像への変化と捉え、この清少納言像の変化は、「香炉峰の雪」の典故を知っていること自体への驚きと賞賛によって引き起こされたと考えた。すなわち、中世での清少納言享受は、言葉で返答せず、動作で応えたその機敏な判断に対する賞賛であつて、「香炉峰の雪」の典故そのものは周知の事実であつたので、それをとりたててほめることはみられなかつたのが、江戸時代の末になると、「香炉峰の雪」を知っていること自体が才女の証あかしと享受されるようになり、それにしたがつて、清少納言像も立ち上がり、腕を高く上げ、これみよがしにその学才を誇るような姿勢になつたと考えたのである。

この中島和歌子の説は興味深い観点を提供し、清少納言像の変貌を見事に説明しているが、もう一つ注目しておかなければ

ならないのは、江戸時代末期に入ると、こうした王朝才女の肖像画が大量に制作されるようになり、しかも、その画像が横長の伝統的な画面から、縦長の画面に変化し、描かれる人物も、立ち上がる姿が多くなっていくという問題である。

清少納言像だけでなく、王朝の文学者の肖像自体があたかも礼拝されるように、憧れを込めて、縦型画面・掛け軸などのかたちで享受されるようになったのである。それらの多くの場面では、清少納言と紫式部が組み合わされて、清紫^{せし}二才女という対となって享受され、ある場合には、紫式部と清少納言と小町または和泉式部などが三才女として画像化されている。平安時代の才女たちは、こうして江戸時代末期に序列化され、紫式部と清少納言を中心とする才女の代表として位置づけ直されたのである。もちろん、その中では、清少納言の洗練された身振りの意味は曖昧化され、「香炉峰の故事」を知っていたというだけの単純な手柄話のレベルで享受されていたのである。

このような動きの中で、清少納言が紫式部と並んで最高の才女として待遇されたのは、江戸時代という時代が、無数の「随筆」を生み出した「随筆の世紀」であったことと深く関係している。鎌倉・室町時代を通じて、源氏物語と比べるとほとんど享受がみられなかった枕草子は、江戸時代に「春曙抄」^{(注5) しんしやう}が刊行されると、連歌・俳諧・戯作^{げさく}の世界で広く享受されるようになり、多くの新しい「随筆」文学の継承者を生み出す契機となっていたのである。

これらの動きは幕末の国学運動や王朝復古イデオロギーと深い関係を持つていよう。幕藩体制に対する鬱積した不満があるべき体制としての王朝国家体制への復古的な幻想を生み出し、「国学」の研究が、文学を通じて王朝国家への憧れを再生産していった時代にあつて、王朝才女たちは天皇制復活の旗手としての役割を背負わされて、もてはやされていたのである。言うまでもなく明治維新はそうした王朝復古精神に導かれるように起こつていたのであるが、文学が政治に利用され、政治的な働きをしていったことによつて、時代は大きな転換点を迎えることとなる。数々の清少納言図はそうした時代の転換期の遺産として、記念碑として現在に残されている。

(二) 二田村雅子「枕草子」雪のいと高う降りたるを、例ならず、御格子参りて「段を教材として読む」による)

(注) 1 業平——在原業平。平安初期の歌人。『伊勢物語』の主人公とされ、好色な男性とイメージされている。

2 斉信——藤原斉信。平安中期の歌人。清少納言と交流があった。

3 新樂府——白居易の新樂府五十首のこと。

4 土佐光起——江戸初期の土佐派の画家。

5 「春曙抄」——『枕草子春曙抄』。江戸前期の古典学者、北村季吟による『枕草子』注釈書。

問一 傍線部1〜5の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に書き改めよ。

問二 傍線部A「知識のその上を定子が求めていることを、瞬時に掴み取って、行動に移した清少納言の振舞い」とあるが、「定子が求めていること」とは、どのようなものか、本文中より四〇字以内で抜き出せ。

問三 傍線部B「二人の突出した共振関係」とあるが、二人の関係を説明したものととして、次のア〜オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 定子は教養を誇る家系の出身であり、清少納言は後宮で評判の才女であり、最優秀の名誉を譲れない緊張関係。

イ 定子は清少納言の学才に一目置き、清少納言は定子の教養に心酔している、互いに身分を越えて敬い合う関係。

ウ 定子が清少納言の才を認めて熱心に教育し、清少納言も日々怠らず勉学に励み続ける、師と弟子のような関係。

エ 定子が清少納言に特別に目をかけ、清少納言は率先して定子が気に入るよう振る舞う、寵愛ちよつぱいと追従の従属関係。

オ 定子が知的な企てをして、清少納言が即座に期待に沿う応答をすることで、高い教養の場を現出する協働関係。

問四 傍線部C「筆者清少納言のいいたいこと」とあるが、それはどのようなことか、一〇〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「男性官人たちの頑なな学びと模倣を挑発し、相対化する」とは、どういうことか、次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 女性の自由な漢詩文の使用が、漢詩文を学問の対象として先人の模倣を大事にしてきた男性官人たちに、規範に反する逸脱として反発を感じさせるということ。

イ 女性が男性の漢詩文の使用を模倣することが、漢詩文を使うのは男性だけであるという固定観念をもった男性官人たちに、自分たちの文化が侵害されたという不快感を催させるということ。

ウ 女性たちが自由に漢詩文を活用することが、男性官人たちに、自分たちの漢詩文使用が格式張った学問の中の旧来の模倣にとどまっているという実態を突きつけるということ。

エ 女性たちが男性の模倣をして漢詩文を使うことが、頑固な男性官人たちに、漢詩文は男性が使うものだという固定観念の見直しを促すものになるということ。

オ 女性が漢詩文を自由に使う様子が、漢詩文を狭い学問の対象としてしか捉えてこなかった男性官人たちに、自由な使い方の便利さに気付かせ模倣させるということ。

問六 江戸時代末期の清少納言図について、その様式上の特徴を三点挙げよ。また、このような清少納言図が描かれた背景としてどのようなことがあったのかを、簡潔に二点にまとめよ。

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、表記の一部を改めた)。(60点)

桐子^{きりこ}は、家族五人で参加するはずだったさくらんぼ狩りツアーに、父と二人で行くことになった。気が進まなかったツアーも、通っている写真教室の「かけら」という題で写真を撮る課題にちょうどいいと思って受け入れ、カメラで目に留まるものを撮りながら過ごしていた。

「桐子、着いたよ」と声をかけられて目を開けると、霧ヶ峰のレストランの駐車場に着いている。途中のピーナスラインではすっかり寝入ってしまった、今がシーズンだというレンゲツツジも全然見られなかった。バスがゆつくりと駐車しているあいだ、売店でぜひカリンジュースの試飲をしよう、¹テンジョウウインがマイクなしで声をはりあげていた。

バスを降りると、空気がひんやりしていて心地よい。道を挟んだ向こうの丘の頂上までは往復で二十分くらいかかるそうだが、やることもないので歩いてみることにする。誘ってもいないのに、父は横を歩いている。

「カリンジュース、飲めるらしいぞ」

「あ、なんか言ってたね」

「後で飲みに行こうか」

「時間があればね」

「桐子、時計持っていないで、時間は何で計るんだ」

「計る? 時間を計るの?」

「講義の時間とか、遅れないのか」

「携帯の時計があるから」

「腕に時計があると便利だぞ」

「携帯だつて便利だよ」

振り向くと、丘の向こうに着陸するのか、ハンングライダーの白い機体がすぐ上にせまって見えた。父はぐつと首を上にならせて、何も言わずに歩いた。

丘の上にはホテルのチャペルにあるような大きな鐘があり、立て看板には『幸せの鐘』と書いてあった。色違いの服を着た双子の男の子たちが鐘を打つ綱をむやみやたらにひっぱっている。鐘つき台の向こうには、冬にはスキー場になるのだろう、誰も乗せていないリフトが斜面の下まで続いている。さっきのハンングライダーはその斜面のずっと向こうに着陸していた。押し付けがましい幸せの鐘の音を、ほとんど動きのない風景が分厚い紙ナプキンのようにゆっくり吸い込んでいく。

わたしは鐘つき台の真正面にあるベンチに腰掛け、小さな兄弟が鐘ならしに熱中するのを見ていた。見ているうちに、その白い台のまだらなはげ具合とか、擦り切れた綱、この涼しさ、このただ広く開けた空と原っぱを、自分はなんとなく知っているような気がしてきた。いくつかのぼんやりした夏の思い出をたどっていくと、この場所、といつても鐘と遠くに見える山と涼しさ、という三つの要素が、おぼろげながら一枚の写真という形で頭に浮かび上がってきた。

父は、あいだにA小さい子どもがもう一人座れるくらいAのすきまを空けて、わたしの隣に座っている。

「お父さん、今ふと思っただけだね、もしかしてここ、来たことない？」

「何？」

「ここ。来たことあるような気がするんだけど。お母さんとお父さんとお兄ちゃんと。小学生のとき、いや違う、もつと前」
「そうだな、あるな。桐子は忘れてるかと思つたよ」

「知つてたの？」

「いや、お父さんもさつき思い出した」

わたしはちよつと身動きすればすぐに吹き飛んでしまいそんな記憶を、慎重に思い出し始めた。

たしか数年前の年末に、古いアルバムをめくつていてその写真を見つけたのだ。頭からタオルケットをかぶつて、青白く不

機嫌そうなたしは向かつて一番左に位置し、鐘つき台のふちに腰掛けていた。その隣に母、兄、父が並んで立っていた。写真のわたしたち四人と、その背後に広がる曇った空のあいだに、今日の前になっているあの鐘があった。また家庭と幼稚園という世界しか知らなかった小さなわたしは、今子どもたちが走り回っているあの場所に腰をかけて、サンダルばきの足を二本、カメラの前にぶら下げたのだった。

「あその鐘のところで、写真を撮ったと思う」

「え、どこだ？」

「あの鐘をバックにして、みんなで写真撮ったよ。アルバムに入ってた」

「そうか、あそこでか」

だからといって、今日鐘つき台で父と二人写真を撮って帰るなんて、そんなセンチメンタルなことはしたくなかった。

あの写真に写っていた子ども二人がいまやそれなりにものを知って、それぞれの生活を持って、兄など新しい家族まで作ってしまったって、十数年後の今に至るといふ事実は、なんだか作り話のように思える。でもわたしは今、現に父と二人で鐘つき台を見ているし、兄も家で娘の面倒を見ているはずなのだから、どちらかと言えば写真のほうが作り物なのではないかという気もする。

今頃母は何をしているだろう。兄は、ちゃんと鞠子ちゃんの面倒を見ているだろうか。隣に寝そべって、だらしなく読書しているだけじゃないだろうか。

父も同じようなことを考えていたかはわからないが、ぼつりと「お母さんや英二は、何やってるかな」と呟いた。

「別に何もしてないと思うよ。鞠子ちゃん、熱ひいたかな」

「どうだろうな」

「お兄ちゃんも来ればよかったのに。お母さんがいるんだから、家にいる必要、絶対なかったよね」

「英二も、疲れてるんだろう」

「あたしだつて疲れてるもん」

「そうか」

「お父さんだつて疲れてるでしょ」

「いや」

「疲れてないの？」

「桐子ほどは」

「あたし、そんなに疲れてるように見える？」

「今、疲れてるつて言つただろう」

^C わたしは意味ありげな沈黙を作つてから、少し強い調子で言つた。

「お父さんて、ほんと話しいがないね」

は、は、と乾いた声で父は笑つた。

「なんか、ただ水に石を落つことしてるみたいなんだよね。お父さんと話してると」

「そうか」

「お父さんは前ここに来たときだつて大人だつたんだから、ふつう覚えてるんじゃないの」

「いや、本当に今さつき思い出したんだよ。ずいぶん昔だつたから」

「お母さん、なんか言つてなかった？」

「いや、お母さんも忘れてたんじゃないか」

わたしはヒザの上に両肘を立てて頭を落とし、髪の毛をぐしゃぐしゃと乱した。髪の毛のすきまから冷たい空気が地肌に触れる。

「お父さん、そんなふうだとそのうち全部忘れちゃうよ」

「ああ、そうだな」

父は力なく笑った。それもすぐに鐘の音にかき消された。

「それに、もつと主張しないと、あたしたちからだつて忘れられちゃうよ」

「いいよ。お父さんは実際、いないようなものだ」

「何それ」

^D 今度は意図せず、わたしは黙った。

少しだけ、一緒に住んでいたころの父を思い出した。

食後の散らかったテーブルとか、ベランダのクッションがやぶけたイス³とか、階段の下に置いてある荷物置きの台とか、そんなもののあいだにすつとなじんで、そのまま同じ風景になっていた父。何種類あるのかわからないグレーの背広を着て、朝八時きっかりに家を出、駅へ向かう人々の中にすぐにまぎれてしまう父。

今でも、父という人間は、決してあのなんとかアルプスのようにくつきりとした形では、見えない。

「これはかけらだな」

父が出し抜けに言った。

「え、何？」

「これは、かけらだ」

「これって何」

「今、見ているものとか、ここにあるもの全部。お父さん。桐子。あの鐘。全部。これがお父さんの主張」

かけらとは、青木金物店の看板だとか、道に転がった空き缶だとか、山の切れ端だと、わたしは思った。でも、父の言うところ^Eに今見ているもの、ここにあるものの全部が何かのかけらだとすれば、その何かとはどんな形をしていて、どれほどの大きさをしたもののなか。

「そうですか」

わたしはバスに戻ろうと立ち上がった。背後で父が、「写真、撮らなくていいのか」と言っているのが聞こえた。

帰りの高速道路はひどい渋滞で、退屈のぎに寝て過ごすしかなかった。ただ、いくら目を閉じて窓枠に頭をもたせかけても、ビーナスラインでよつぱど熟睡したらしく、眠ることができなかった。さっきまで後ろの女子大生たちはさんざん文句を言っていたのに、今ではすっかり寝静まっている。父は彼女たちよりずっと前に寝ていた。色白の父の手は、ヒンソウな体つきと歳^{とし}のわりにはふつくらしていて、しわのよつた半ズボンのヒザに半分上向きになって放り出されていた。

新宿駅が近づいてくると、父はひとりで目を覚ました。今度はわたしが目をつむって、寝ているふりをした。

今日は暑かったなあ、とつぶやくのが聞こえる。そうだね、と答えそうになる。

家に帰ると、鞠子ちゃんはまだ寝込んでいて、母は夕飯を作るのに忙しく、兄は居間のソファでパソコン雑誌を広げている。帰りのサービスエリアで買った『雷鳥の里』を手渡すと、「おお、ありがとう」と言いつて雑誌を読みながらがつがつ食べ始めた。

「鞠子ちゃんは」

「なんか、熱はさがったんだけど、またちょっと苦しそうなんだよな」

「そんなの読んでいいの」

「ずっと横にいてじいっと見つめてたって、子どもは元気にならないんだよ」

「お母さん、りかさんに言うと思うよ」

「お前、おとな気ないな。そんなに一緒に来てほしかったのか？」

「お父さんと二人は難しいよ。心底」

兄は本から目を上げて、珍しい虫でも見るような表情でわたしを見つめた。包み紙に描かれた雷鳥がもう五、六羽、パッチ

ワークのソファカバーの上に落ちてゐる。

「桐子、お父さんに難しさを感じたのか？ お父さんはむしろ簡単だぞ」

「だってぜんぜん芯がないんだもん。気骨とか、⁵ハキとか、ぜんぜん」

「お前、そういうのを求めてたのか」

部屋着に着替えた父が居間に入ってきて、乾いた足音をさせてわたしたちの横を通り、台所に抜けて行った。

「求めてなかった」

答えると、兄はすぐさま興味を失って、雑誌に目を落としたり。母が夕飯の手伝いをするようわたしと兄の名前を呼んだ。

結局その日の写真を現像に出したのは、三週間以上もたつてからのことだった。さくらんぼ狩りの翌週から梅雨に入ったせいか、わたしはなんとなく外出がおっくうになってしまつて、カメラケースごと部屋のテレビ台の上に着ちやつておいたのだ。写真教室では、これまでに撮つた写真の中から数枚を適当に選んで、提出した。それは雑誌のコンテストに応募されることになっていて、結果は二ヶ月後に発表ということだったけれども、わたしは早々に期待するのをやめた。

梅雨もそろそろ明けそうな今日になってやつと、夕方のアルバイトが終わつたあとで、近くの電器屋に現像に出した写真を受け取りに行った。自転車で走っていると、昼過ぎまで降り続いていた雨のせいで、いつもより柔らかいアスファルトの感触がペダル足の裏につたわつた。道の白線はときどき光つて見えた。

店を出てからすぐ、駐輪場の自販機の横で受け取つた写真にばらばら目を通してみたけれど、どれもこれも似たようなアングルでばつとしない。「自然」とか「日本の美」とか、あたりさわりのないタイトルならなんでも似合いそうな平凡な写真ばかりだった。それでも何か美点を見つけられはしないかと、わたしは自販機によりかかり、今度は一枚一枚をじっくりと眺めた。バスの中から撮つたぶれた写真、そば畑の写真、その向こうの山並み、さくらんぼを食べる人たち、あぜ道、丘から見た霧ヶ峰……切り取られて、音も匂いも失つた風景たち。

疲れと失望を感じ始めた三順目で、そば畑からさくらんぼ園を写したうちの一枚に、中年の女たちに混じって父の横顔が小さく写っているのを見つけた。撮ったときには全然気づかなかった。

右奥の木の下に立っている父は、さくらんぼを欲しがるおばさん連中に囲まれながら、不思議とそこに写っている誰のことも見ていないようだった。顔は少し上向きで、口が半開きになっていて、表情は読みとれないけれど、その横顔はやっぱり父だった。

^F どこを見るでもなく何を言うでもなく、ただ空間に向けられた視線が、写真の中を斜めに突っ切っている。

じっと見ていると、わたしは昔からちゃんと父を知っていたという気がしたし、同時に、写真の中の人はまったくの見知らぬ人であるようにも感じた。もたれた肩から伝わってくる自販機の熱とかすかな振動は、どこまでも続く沈黙に守られたその風景を散りぢりにしてしまいそうで、わたしは体をまっすぐにした。

父の視線は写真をはみ出して、雲の切れ目に薄い色の星が浮かぶ東の空に向かっている。

(青山七恵「かけら」による)

問一 傍線部1〜5のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 傍線部A「あいだに小さい子どもがもう一人座れるくらいのすきまを空けて」とあるが、ここには父と娘のどのような関係性があらわれているか、五〇字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「どちらかと言えば写真のほう作り物なのではないかという気もある」とあるが、これはどういうことを説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 今の自分たちの姿が大きく変わりすぎて、写真に写っていたころの家族がどのようなか、うまく思い出せないということ。

イ 写真を通して昔の幸せだった家族の思い出をつむぐことは、面倒なことの多い家族の現実から目をそらすための作り物の記憶に思えるということ。

ウ 写真のなかの小さな子どもがそれぞれに人生を歩んで今のそれぞれの姿になったはずなのに、実際に今を生きる自分には、写真の中の自分が、なにか他人のように思えるということ。

エ 家族がそれぞれにさまざまな事情を抱えて生きている現実の中では、不機嫌そうなたしがいる家族の現実が写った写真なのに、そのような団らんの時があったことに実感がわかないということ。

オ 自分たちがかつてみんな仲良く笑顔を絶やさないう家族であったという記憶は、長い年月が経つ中で美化された創作なのだということ。

問四 傍線部C「わたしは意味ありげな沈黙を作ってから、少し強い調子で言った」、傍線部D「今度は意図せず、わたしは黙った」とあるが、二つの異なる沈黙はそれぞれどのようなものか、説明せよ。

問五 傍線部E「今見ているもの、ここにあるものの全部が何かのかけらだとすれば、その何かとはどんな形をしていて、どれほどの大きさをしたものなのか」とあるが、どのようなことに思い至ったのか、六〇字以内で説明せよ。

問六 傍線部F「じつと見ていると、わたしは昔からちゃんと父を知っていたという気がしたし、同時に、写真の中の人は

まったくの見知らぬ人であるようにも感じた」とあるが、これはどういうことか。九〇字以内で説明せよ。

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた)。(40点)

(注1) 四條大納言、(注2) 所勞大事にて、既に死すべくならければ、^A 大貳高遠三位、(注3) 平礼に下の袴(注4)こはらかにて、(注5) 雑色など(注6)ひきつくるひて、大納言のもとに参られたりければ、とぶらひに行きあひたる人々、「こはいかなる事にて、所勞の人のもとへことにひきつくるひて参られたる事、(注8) 尾籠の人かな」と口々にそしりけり。さて、大納言、臥(注9)しながら対面して、定めて所勞の事とぶらふならむと思はれるに、とぶらひをば一言も言はで、(注10) 「貫之歌の中に

逢坂の関の清水に影見えていまやひくらむ望月の駒

高遠歌に

逢坂の関の岩かど踏みならし山立ちいづるきり原の駒 (注11)

この両首、かれこれ一、二返詠(注12)じ候へば、高遠歌まさりて覚え候ふを、四、五返詠(注13)じ候へば、貫之歌ことのほかにまさりて候ふ。この不審、御存生の時、申し候はんとて参りて候ふ」と申されければ、大納言、かき起こされて、落涙して、しばしありて、「公任(注14)かくれて後、誰か歌を大事にせんずらんと思ひつるに、御志深かりける事、あはれにありがたく候ふ」とて、この両首を二、三返ばかり吟(注15)じて、「貫之歌はさせる詞の寄せもなく、(注16) うるはしくいひながしたる。御歌は、「関の岩かど踏みならし」といふより、「山立ちいづるきり原の駒」とまで、詞の寄せたくみなる故に、貫之歌には劣り候ふなり」と言はれければ、「この不審申し候はんとて、参りて候ふなり」とて、所勞をつひにとぶらはで、帰られけり。そのうち大納言、「か様の人、未代にはありがたくや。平礼にてひきつくるひたるも和歌の談議の故なり」と侍りけるにあはせて、またの日、(注17) なよらかなるさ

まにて、雑色などもさるやうにて参りて、内へも入らで所勞のとぶらひばかり言ひて、門より歸られければ、「昨日ひきつくろはれたりしは、まことに和歌の故なりけり」と、人々言ひけり。和歌を賞する事、いにしへの人はかくこそありけれ。^E

〔西行上人談抄〕による

(注) 1 四条大納言——藤原公任。中古三十六歌仙の一人。歌学にも通じていた。

2 所勞——病氣。

3 大貳高遠三位——藤原高遠。中古三十六歌仙の一人。

4 平礼——平礼烏帽子えぼしのこと。

5 こはらか——糊が利いていてごわごわした様子。

6 雑色——お供の者。

7 ひきつくろひて——整えて。

8 尾籠——礼儀をわきまえないこと。当時病氣見舞いは私的な行為で、正装はしなかった。

9 貫之——紀貫之。三十六歌仙の一人。

10 望月——宮中に献上する馬を育てる信濃国望月の牧場。

11 きり原——望月と同様に宮中に献上する馬を育てる信濃国桐原の牧場。

12 寄せ——縁語。

13 うるはしく——ここでは表現技巧の卓越や奇抜さとは対照的な、端正で美しい様態。

14 なよらかなるさま——糊気のないしなやかな衣服の様子。

問一 傍線部A「既に死すべくなられる時」を現代語訳せよ。

問二 傍線部B「とぶらひに行きあひたる人々」について、どのような「人々」か、具体的に説明せよ。

問三 傍線部C「この不審、御存生の時、申し候はんとて参りて候ふ」について、誰の発言か明記した上で、「この不審」の内容を明らかにしながら現代語訳せよ。

問四 傍線部D「詞の寄せたくみなる故に、貫之歌には劣り候ふなり」とあるがどういふことか、具体的に説明せよ。

問五 傍線部E「かくこそありけれ」とはどういふことか、最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び記号で答えよ。

ア 他人の意見に耳を傾けることなく、自分の和歌が優れていることを信じて疑わなかったということ。

イ 自分の和歌の完成度に自信を持っていると同時に、他人の和歌の優れた点も認めていたということ。

ウ 世間一般の常識的なことを二の次にするほどに、和歌を究めることに熱心であったということ。

エ 和歌を究めることばかり優先して、病気見舞いの作法すらも学んでこなかったということ。

オ 和歌以外のことに興味がなく、世間の作法など無視して良いものと考えていたということ。

第四問

次の文章を読んで、後の問に答えよ(設問の都合上、返り点を省いた箇所、及び本文を一部改めた箇所がある)。(40点)

于^(注1)生^{せい}名^な環^{えい}字^じ小^{せう}宋^{そう}益^{えき}都^と人^{にん}。読^{よみ}書^{しよ}體^{たい}泉^{せん}寺^じ。夜^や方^{はう}

披^(注2)誦^{しよ}忽^{いつ}一^{いつ}女子^{じよ}在^あ窓^{さう}外^{がい}贊^(注3)曰^{いふ}「于^(注4)相^{しやう}公^{こう}勤^{きん}読^{よみ}哉^や」因^よ

念^(注5)深^{しん}山^{さん}何^{なに}処^{じよ}得^え二^に女子^{じよ}。方^{はう}疑^ぎ思^し間^{かん}女^{にょ}已^い推^(注6)扉^ひ笑^{わら}入^い

曰^{いふ}「勤^{きん}読^{よみ}哉^や」于^{こゝ}驚^{おどろ}起^た視^み之^を。緑^{りよく}衣^い長^{なが}裙^(注7)婉^(注8)妙^{めう}無^な比^ひ于^{こゝ}

知^し非^ひ人^{にん}。固^こ詰^{じつ}里^り居^ゐ。女^{にょ}曰^{いふ}「君^{きみ}視^み妾^{せつ}。当^{あた}非^ひ能^な咋^(注9)噬^せ者^{もの}。

何^{なに}勞^{らう}窮^{きゆう}問^{もん}」于^{こゝ}心^{こゝろ}好^{この}之^を。遂^{すゐ}与^よ二^に寝^ね。処^{じよ}羅^(注10)襦^{じゆ}既^い解^げ。腰^{こし}細^こ

殆^(注11)不^な盈^み掬^く。更^(注12)籌^{ちゆう}方^{はう}尽^{じん}。翩^(注13)然^{ぜん}遂^{すゐ}去^さ。由^よ此^{こゝ}無^な二^に夕^{せき}不^な至^{いた}。

(中略) 更^(注12)漏^{ろう}既^い歇^や。披^ひ衣^い下^{くだ}榻^(注13)。方^{はう}将^{まさ}啓^{ひら}閔^{くわん}徘徊^{かい}復^た返^{かへ}

曰、^ク「不^ル知^ラ何^カ故^カ、^(注14)慍^{てい}慍^{さい}、^(注14)慍^{さい}慍^{さい}、^(注14)心^こ怯^{おび}、^(注14)乞^ふ送^つ我^ら、^(注14)出^で門^{かど}」于^こ果^は起^き送^つ
 諸^{これ}門^{かど}外^を女^を曰^ク、「君^{きみ}、^(注15)望^ま我^ら、^(注15)我^ら、^(注15)踰^こ垣^{かき}去^ら、^(注15)君^{きみ}方^は歸^れ」于^こ曰^ク
 「諾^{ナリト}」視^ル下^を女^を、^(注15)軫^こ過^し房^を、^(注16)廊^を寂^し不^中復^た見^上方^を、^(注16)欲^{スレバ}歸^{リテ}寢^ム、^(注16)聞^ク女^の号^を
 救^{ヒラ}甚^ダ急^{ナル}于^こ奔^{ハシ}往^ク、^(注17)四^{スル}顧^{ニケレドモ}無^レ跡^を、^(注17)声^ハ在^リ檐^{えん}間^{かん}、^(注17)拳^{ゲテ}首^ヲ細^{スレバ}視^{スレバ}
 則^チ一^{いつ}蛛^{ちゆ}大^{ナル}如^キ彈^{たま}、^(注18)搏^{まる}捉^{とら}一^つ物^ヲ、^(注18)哀^あ鳴^な声^{せい}嘶^{せい}于^こ破^レ網^ヲ挑^か下^を
 去^{レバ}其^の縛^{ばく}纏^{てん}、^(注19)則^チ一^つ綠^{ろく}蜂^{へい}奄^{えん}然^{ぜん}、^(注19)將^ニ斃^た矣^い、^(注19)捉^{ヘテ}歸^リ室^を中^を置^ク
 案^(注21)頭^を停^{マリ}蘇^よ、^(注21)移^シ時^ヲ、^(注21)始^{メテ}能^ク行^ク步^ス、^(注21)徐^ニ登^リ硯^{けん}池^を、^(注21)自^ラ以^テ身^ヲ投^ジ
 墨^を汁^を出^デ伏^シ机^を上^を走^{リテ}作^ル謝^ノ字^ヲ、^(注22)頻^ニ展^の雙^を翼^ヲ、^(注22)已^ニ乃^チ穿^{ウガ}窓^ヲ而^{シテ}
 去^ル自^リ此^レ遂^ニ絕^ユ

『聊齋志異』による

(注) 1 于生——于という書生。 2 披誦——書物を開いて読む。 3 贊——褒める。 4 相公——男子の敬称。

5 裙——スカート。 6 婉妙——美しい様。 7 咋噬——^か噛みつき食らう。 8 羅襦——薄衣の肌着。

9 不盈掬——水をすくう両方の手のひらにも満たない。 10 更籌——夜の時刻を計る器。 11 翩然——ひるがえる様。

12 更漏既歇——夜が明ける。 13 榻——ベッド。 14 惴慚——恐れる。 15 軫過——巡り通る。

16 房廊——部屋と廊下。 17 檐——のき、ひさし。 18 声嘶——声がふるえる。 19 縛纏——しばり巻きつける。

20 奄然——たちまち。 21 案頭——机の上。

問一 于が女に出会ったときの印象はどのようなものであったか、二点にまとめて説明せよ。

問二 傍線部Aは「当に能く咋噬する者に非ざるべし」と読む。白文に返り点を付けよ。また、この文を現代語訳せよ。

問三 本文中で女が于に依頼したことがあるが、その内容はどのようなものだったか、次のア～オの中から、最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 于に、自分が家に入ることを快く許可してほしいと頼んだ。

イ 于に、夜が明けるまで自分と一緒にいてほしいと頼んだ。

ウ 于に、自分が帰る時、姿が見えなくなるまで見守ってほしいと頼んだ。

エ 于に、自分これから帰る後をけっして追わないでほしいと頼んだ。

オ 于に、けっして自分の正体を探ろうとしないでほしいと頼んだ。

問四 女の正体を暗示している表現を、本文中から二箇所、それぞれ八字以内(句読点は含まない)で抜き出せ。

問五 緑蜂は于に対して、最後に、どのような気持ちを、どのような方法で伝えたか、具体的に説明せよ。

問六 傍線部B「自此遂絶」はどういうことか、説明せよ。

国語B 解答用紙 (二枚中 その一)

受験番号

得点

第一問

問六		問五	問四		問三	問二	問一
背景	特徴						
							1
							2
							3
							4
							5

第二問

問六			問五			問四		問三	問二	問一
						D	C			
										1
										2
										3
										4
										5

受験番号

国語B 解答用紙 (二枚中 その二)

第三問

問一	
問二	
問三	(発言者) (現代語訳)
問四	
問五	

第四問

問一	
問二	(返り点) 当 非 能 昨 噬 者 (現代語訳)
問三	
問四	
問五	
問六	

国語 B 正答例

第一問

問一 1 ささい 2 敢然 3 ろうらく 4 造詣 5 けんでん

問二 漢詩文の教養を基盤に、自在に加工し、和文化し、日常の端々に使いこなすこと

問三 才

問四 定子後宮は、中宮定子が、常に女房教育に意欲的で叱咤激励に余念がなく、趣向を提示してふさわしい答えを要求し続ける、あらゆる機会を捉えて宮廷文化創出の努力を欠かさない場であったということ。

問五 ウ

問六 特徴・立って簾を上げる立像で描かれたこと

・縦型画面・掛け軸などのかたちになったこと

・紫式部や和泉式部や小野小町と組み合わせられて、平安時代の才女として画像化されたこと。

背景・「春曙抄」が刊行されて広く享受され、無数の「随筆」が生み出された時代であったこと。

・国学運動や王朝復古イデオロギーが起こり、王朝才女たちが、天皇制復活の旗手としてもはやされたこと。

第二問

問一 1 添乗員 2 膝 3 椅子 4 貧相 5 覇気

問二 家族として一緒にいるが、互いのことには深く立ち入らないという、つかず離れずの距離感がある関係性。

問三 エ

問四 C 父に対してこうであってほしいという思いが通じないからだちを示すもの

D 予想もしなかった父の心中を垣間見て、虚をつかれた動揺をあらわすもの

問五 それぞれに見えているものや、それぞれの存在が、もっとおおきなものの一部であって、その全体像は捉えようがないということ。

問六 一見とらえどころのない父の姿は昔から知っているという気がしたし、その一方で、自分が見えていなかったものを見ていたような父の姿を、全く知らない人であるようにも感じたということ。

第三問

問一 いよいよ死になられた時

問二 公任のお見舞いで高遠と出くわした人々

問三 発言者 高遠

一、二回声に出して詠むと自詠が良いように思えるが、四、五回声に出して詠むと貫之の和歌の方が特に優れていると思ってしまうのは何故なのか、公任様をご存命の内に、お尋ね申し上げようと参上しました。

問四 高遠の和歌は地名「桐原」に「霧」を掛けて、また「霧」と縁語である「山」「立」を詠み込む等、修辭の趣向を凝らしているが故に技術が先に立ってしまったて、貫之の和歌のような整った美しさに欠けているということ。

問五 ウ

第四問

問一 ・非常に美しく、優雅な女性であると感じた。

・人間ではない、異質な存在であると感じた。

問二 (返り点) 当^レ 非^ニ 能^ニ 咋^一 噬^者 者^一

(現代語訳) (当然) あなたを取って食べることができるような者ではないはずだ。

問三 ウ

問四 緑衣長裙（、婉妙無比）

腰細殆不盈掬

問五 于への感謝の気持ちを、自らを墨汁に投げ入れ、その後、机の上に身を横たえ、身体を動かして「謝」の字を書くことによって伝えた。

問六 この時から、女は于のもとに姿を見せなくなった。